

東京大學理工學研究所

第6回定期講演會プログラム

日時 昭和25年6月8日(木), 9日(金)

場所 東京都目黒區駒場町855 東京大學理工學研究所

○印は講演者, ()内は講演時間(分)

第1會場

第1日(6月8日,木)9時—12時

開會の辞 所長 武藤俊之助

1-1. 二酸化マンガン沈澱のトポケミストリ

(10) ○藪田孝彦, 牧島象二。硫酸マンガ
ン溶液に過マンガン酸カリ溶液を滴下, ガラス電極で
pH を一定に保ち, 得た Mn_2O_3 の沈澱の色調, 濾過性,
反應性を調べた。

1-2. 空隙率と粒徑の關係に就ての理論の試み

(10) 早川宗八郎。粉體の粒子一個について, その自
由エネルギーに相當する量を假定して, その極小條件か
ら, 平均粒徑と空隙率の關係を導き, Roller によつて
與えられた關係を説明する。

1-3. 濕氣の吸收發散及び通過膜の透濕性につ
いて (10) 武田文七。前報に引きつづいて, 纖維
素誘導體膜, 合成樹脂膜の透濕性の溫度による變化を測
定し, 透濕の機構を推論した。新に難透濕性と思われる
合成樹脂膜を選び測定し, 疎水性基が透濕を妨げる重要
なる因子であることを例示する。

1-4. 液體の蒸發速度の研究(第1報) (10)

永井雄三郎, ○玉井康勝。常溫常壓で大氣中に擴散して
行く蒸溜水の蒸發速度を測つた。又, 蒸發に伴つて水面
に生ずる溫度降下を知る方法を考え, その結果を吟味し
た。

1-5. 自動操作式小型分溜塔の製作 (10) 田村
孝章。試料を仕込めば後は自動的に動作し得る分溜塔を
今回試作したので, その構造及びそれから得た分溜曲線
の一例をのべる。

1-6. 半微量用迴轉型分溜塔 (8) ○田村孝章,
古江典昭。分析試料 10 g 以内で分溜を行い得る塔を作
るために, 小型の Spinning Band 型のを試作したの

で, この塔の性能についてのべる。

1-7. キュルダール窒素の簡易微量定量法 (8)

岩井浩一。普通のキュルダール窒素定量法と同一原理
で微量通氣管を用い, 100 r 附近の有機窒素を同時に多
數, 迅速簡易に定量することができた。

1-8. アミノ酸のペーパークロマトグラフに對
する鹽酸の影響 (10) 安藤銳郎, ○石井信一。ペー

パークロマトグラフ法でアミノ酸を分析する際, 試料中
にはしばしば鹽酸が含まれている。この鹽酸の影響を若
干系統的に調べた。

1-9. クルペインの末端カルボキシルについて

(10) ○安藤銳郎, 橋本千恵子。クルペイン(硫酸鹽)
分子をおだやかにメチルエステル化しえて, 末端カルボ
キシル基の存在即ち鎖状ポリペプチドであることを示し
た。

1-10. タバコ・モザイク・バイラスの超遠心分
離機による精製について (10) ○渡邊格, 大塚由己,
水島三一郎。超遠心分離機によりタバコ・モザイク・バイ
ラスを精製し, その純度を生物學的, 化學的, 物理的方
法でしらべた。

1-11. ヌクレオクルペインの抽出について

(10) 渡邊格, ○鈴木堅之。鹹白子からヌクレオクルペ
インの抽出精製を行い, その若干の化學的性質を研究し
た。

1-12. 酵母核酸の分子形について (10) 渡邊
格, ○磯見二郎。酵母核酸の擴散及び粘性を測定し, こ
の説明として徑約 16 Å, 長さ 200 Å, 分子量約 28,000
の棒狀分子なることが判明した。

1-13. 數種の核酸の電氣泳動易動度について

(10) 渡邊格, ○宇井信生。Tiselius 型の電氣泳動裝
置を用い, 數種のデオキシ核酸, リボ核酸の電氣泳動易
動度を測定し, 比較検討を行つた。

1-14. 滲透壓の測定 (10) 大塚由己。水溶液の